

話をしながらベッドサイドで共に時間を過ごしていた。患者に対し何をしてあげたらいいのかわからないと無力感を抱いている家族に、看護師が日々行っているケアへの参加を促し一緒に行くことで、家族の思いが表出し潜在していたニーズが満たされたと考えられる。【おわりに】 終末期の患者を抱える家族は悲しみ、無力感や孤立感という感情を抱えているといわれている。看護師は、患者を看取る家族の感情やニーズを捉え、ケアを行っていくことが重要である。

P 4. 医療者に不満を訴えていた患者が本当に伝えたかったこと

久保ひかり,¹ 春山 幸子,¹ 佐藤 美希²
町田 裕子,¹ 小保方 馨,¹ 小見 雄介¹
松本 知沙,^{1,2} 友野 真映,^{1,2} 湯澤 美咲^{1,2}
新井祐美子,^{1,2} 杉村みどり,² 岩田かをる¹
佐藤 浩二,¹ 阿部 毅彦¹

(1 前橋赤十字病院 かんわ支援チーム

2 前橋赤十字病院 10号病棟)

【はじめに】 がん患者は病状の進行に伴い、今まで自分でできていたことができなくなったり、死を現実的に意識しなければならない状況に置かれる。そのような状況に置かれた患者は、時として医療者へ怒りや不満を訴えることがある。医療者は患者の不満に対し、その都度対応するが、不満がかえって増強するケースもある。今回、医療者に不満を訴えていた終末期がん患者と関わる機会を得た。患者が本当に伝えたかったことは何か考察したので報告する。【事例】 A氏は50歳代の女性。胆嚢がん、多発肝転移の診断で化学療法を行っていた。A氏は看護師であった。200X年そわそわして落ち着かないことを主訴に入院、かんわ支援チーム（以下、チーム）に依頼となった。話を聴いているときや家族の面会があるときは落ち着いて過ごせていたため、チームとしては傾聴を行っていた。状態悪化に伴いADLが低下してくると、「ガーゼの当て方が看護師によって違う!」「使ったものはすぐに片付けて欲しいのに、そのままになっているのが嫌!」など看護師への不満や怒りを表出するようになった。看護師間でカンファレンスを行い、ケアの統一を図り、対応した。しかし、A氏の様子は変わらなかった。カンファレンスの数日後に死亡退院となった。死亡退院後もチームや看護師の中で「どのように関わればよかったか」という思いが残り、当院とB病院緩和ケアチームとの合同カンファレンスにおいて事例検討を行った。その際、「A氏はなぜ、何に怒っていたのか」という視点で話し合った。【考察】 A氏は病状の悪化に伴い、「思うようにいかない」つらさを抱えていたと思われる。「思うようにいかないつらさが伝わらない」「つ

らい気持ちをわかってほしい」ことが怒りや不満の原因になっていたのではないかと。A氏が「つらい気持ちをわかってもらえた」と思えるようなケアを話し合う必要があったと考える。

セッション4 ポスター

P 5. 退院前の外泊から生活支援チームが関わったことで、「家に帰りたい」希望が叶った事例

新井 薫

(NPO法人在宅福祉かんわケア大地

居宅介護支援事業所さくら)

【事例】 70歳代女性。鬱治療中のK/Pの長女と孫の三人暮らし。介護経験なし。経済的余裕あり。介護保険有。左大腿部頸部骨折にて入院。右大腿肉腫・多発骨転移・多発リンパ節転移診断。緩和治療の方針となる。ADLはベッド上全介助。意識障害、軽度認知症状あり。【経過】 入院から3か月後、退院に向けてサービス調整の依頼を受け訪問。以前から本人は在宅希望である事を確認した。主介護者となる長女の不安を傾聴すると、経験の無い介護の不安に、状態が悪化した時の不安が加わり、長女自らがパニックになってしまうのではないかと考えていることがわかった。外泊中の医療と介護の不安を整理しサービスを提示。1泊2日の外泊でも今後の在宅での生活をイメージ出来る事を目標に、自費ではあるが介護保険利用と同様のサービスでサポートすることにした。介護経験が無いことの不安を解消する為、直接的な介護はすべて一日複数回ヘルパーが訪問し行う事にした。鬱症の長女が不安からパニックにならないよう、精神的サポートにも重点を置き家族の不安や苦しみを傾聴することも目標とした。訪問翌日にはベッドを搬入し、3日後に試験外泊した。長女は自宅での生活に自信を持ち、外泊から4日後自宅に退院し、本人はその10日後に穏やかに旅立たれた。【まとめ】 外泊の場合介護保険が適応されない為、介護サービスを利用しないケースが多い。しかし、本事例のように、外泊時にも生活支援チーム（ヘルパー・福祉用具・ケアマネ等）が関わり、実際介護サポートのある生活を経験することで、在宅療養の不安を軽減し、利用者家族の希望する自宅退院につながることができる。

P 6. 終末期がん患者の親子関係の修復につながった看護援助

小野澤美絵, 京田亜由美, 佐々木万里子

長沢 仁子, 竹田 果南, 福田 元子

小笠原一夫 (緩和ケア診療所・いっぽ)

【はじめに】 事例紹介: B氏は、子宮がんの60歳代で、